

# 先人の知恵を、今、活かす

岡田奈々

昨年、7月に行われた「氷室開き」。今年もその氷室の復活準備を始めました。「氷室」とは冬に自然にできた氷を、地面に穴を掘って埋めておけば、夏に利用できるのではないかとすることで生み出されたものです。自然の知恵から生まれたまさに「自然の冷蔵庫」です。奈良時代に考案され、当時すごく珍しかった氷は殿様方をはじめ多くの人々に喜ばれたようです。昨年は、この先人の大事な遺産を将来につなげていこうと、21世紀の森の夏木原キャンプ場の氷室に雪や氷を入れ夏に備えていました。しかし、冬に汗を流しながら必死に詰めた氷はすべて溶けてなくなっていました。「7年前はうまくいったのに、地球温暖化が原因なのだろうか」、この失敗から身近に環境問題を考えることが出来ました。

今年も寒くなってきた、雪も降り始めた、今年こそは「氷室」を成功させよう、どうやったらうまくいくのだろうか、そんなことを考えながら、昨年12月25日に氷室に詰めるもみ殻を取りに防府市へ行ってきました。そこには自分の背丈よりも何倍もあるずっと高いもみ殻の山がありました。100リットルのもみ殻袋を80枚もっていきましたが「全然足りないですね」とつい笑ってしまうような量のもみ殻でした。ひたすら黙々とスコップでもみ殻を袋に詰めていきますが、案の定なかなか減ることはありません。20袋目まではずいぶん早く終わった気がします。しかし、そこから30、40とゆっくりと進み、突然さらさらともみ殻の山が壊れ始め、作業は中断しました。もみ殻といえども100リットルにもなるとかなりの重量です。50、60、70、ようやく80袋入れ終わったときには、寒さを忘れ、汗をかいていました。そのモミガラは現在、夏木原キャンプ場に運ばれ、氷室に詰められるのを待っています。



夏木原キャンプ場の氷室



運ばれたもみ殻

今年、「参加型の氷室」を考えています。昨年の反省として、運搬の途中で氷が溶けかけ、溶けやすい状態にあったのではないかとというアドバイスから「雪や氷は入れる前にもう一度完全に冷やしてしまう」、地熱の上昇から守り切れなかったのではないかとという考えから「もみ殻をもっとしっかり、多く詰めよう」、などの工夫も考えています。しかし、本当にこれだけで大丈夫なのだろうか、とも不安になりました。「地球温暖化」、昔と今、騒がれているように、気温の上昇がみられます。秋田県の氷室も去年は初めて溶けてしまった、と聞きました。変化してきている、その溝を埋めなくてはならないのではないかと、そのような考えからこの「参加型の氷室」の計画案が生まれました。例えば、発泡スチロールや魔法瓶に雪を詰め一緒に氷室に入れてしまおう、というものです。つまり参加者が考える「こうしたら氷を夏に残せるんじゃないか」を試みます。

昔の人が残した知恵を、現代の人が、自分達の知恵、工夫を使い、新たな形にする。昔から学んで今の問題解決に活かしていく、この「氷室」がそのような学びの場になるのではないかと期待しています。